

三三九、五九七

第六章 特攻作戦

特攻作戦の特質

特攻作戦の目的

- 1 陸海軍航空特攻隊實現に至る迄の経緯
- 2 比島作戦に於ける航空特攻
- 3 沖縄作戦に於ける航空特攻
- 4 本土作戦準備に於ける航空特攻
- 5 航空特攻作戦の一般要領
- 6 空母攻撃に於ける特攻
  - A 「レイテ」作戦に於ける義勇作戦
  - B 「レイテ」作戦に於ける第二挺進團の空挺作戦
  - C 沖縄作戦に於ける義勇作戦
- 7 航空特攻兵器

A 標 花

（部 第一）

23  
19





B 極 詳

(三) 海上特攻作戦

- 1. 豆潜水艦
  - 2. 海上挺進戦隊
  - 3. 人間魚雷
  - 4. 其の他の水中特攻兵器
- 陸地上特攻作戦
- 1. 開戦前に於ける地上特攻教育
  - 2. 南東方面作戦に於ける地上特攻作戦
  - 3. 比島沖繩作戦に於ける地上特攻
  - 4. 本土作戦準備に於ける地上特攻

第六章 特攻作戦

(一) 特攻作戦の特質

防禦戦團に於て一地點を固守すべき任務を有する部隊が最後の一人まで戦闘を繼續する場合其の戦闘力は恐るべく一人の戦士一挺の機関銃に對しても攻者は其大なる犠牲を拂はねばならぬことは淺多戦史の例證する所である。これは此の部隊全員が齊しく死を賭する所の絶對の境地に立ち此に臨むべき力が發揮せられるからである。然らば此の方式即ち全員死を以し生きて再び歸らざる決死の戦闘力を移動性を有する攻撃の場合に用ひたならば如何なる結果を生むであらうか。

日本に於ては古來君主及國家の爲に死する事を無上の名譽として居り死を以て武勇を備ふる武勇は更に次々に同様の史實を生み時に必死の取鑿に任ずる將兵を募り之のみを以て決死隊を編成し戰場に於て偉大なる戦果を擧げたことが屢々である。實に決死隊は戰場第一の



若てあり之に名を運ぬることとは武人最高の名譽であつた。日露戦争の旅順要塞戦に於ける陸軍の白樺隊、海軍の旅順閉塞隊、支那事變の第一次上海戦に於ける海軍三勇士及太平洋戦争海戦に於ける特殊潜水艇の勇士等皆此の例である。

太平洋戦争に於ては此の決死隊を特攻隊（特別攻撃隊の略）と呼び此の部隊の作戦を特攻作戦と稱し戦場隨所に顕著なる戦果を挙げたのである。

日本軍は平時豫想する對倭、對米防衛戦争に於て兵力特に物的戦力著しく劣り數量的には到底立ち困難なるものがあつたので陸軍、海軍ともに精神力を以て物質力に拮抗せしめ得る如く必任義務制の下に於ける精兵主義を採用し精神至上主義を以て教育訓練の精到を期しつゝあつた。

太平洋戦争の各戦場に決戦の様相現はれ日本軍の物質力の劣勢が明確に認識せらるゝやうになり優勢なる敵に對し國家を護持しなけれ

ばならぬといふ絶對的境地に立つた軍隊は大本營乃至は上級司令部の指導に俟つことなく各部隊進んで特攻作戦を敢行した。

當初此等の地上特攻隊は容易なる兵器を携行し主として「ゲリラ」的なる機動性の發揮により敵の意表に出でて捨身の行動を採り功を奏したものであるが次の時代には航空及海上の特攻隊が現はれ有力なる兵器を裝備し遂次人間の操縦する砲弾、人間の精神力を具有する爆弾といふ風な貌を採るに至つた。

一九四三年頃から戦況は明かに消耗戦的相貌を呈し來り戦場は遂次日本本土に接近して來た。此の深刻なる消耗戦時代に際して日本軍が特攻作戦を以て消耗戦の對症手段としたことはこれ自然の推移であり當然の歸結であつた。即ち日本の飛行機一機乃至數機の体當りを以て敵の大型船を撃沈することが出來、或は人間魚雷を以て敵の巨艦を屠ることが出來れば人的資源比較的豊富なる日本が優勢なる敵軍の強ふる消耗戦に堪へ得るといふ結論を生んだのである。正に



是精神力と物質力との戦である。

特攻特攻  
必死

一般の戦場に於ては成るべく人的消耗を少くして兵器を使用し此の間敵に少しでも多くの打撃を與へやうといふ考が基礎になつて居るが特攻戦場に於ては自己の生命は必ず失ふが其の幾倍か幾十倍かの精神的打撃と物質的損害とを敵に與へやうといふのである。而して此の種部隊の編成及此の種作戦の採用は多くの場合命令に依ることなく個人の發意を重んじて成立し上級指揮官は特攻作戦が成功する如く各種の配慮を行ふのを通常とし特攻の志願者は其の所要數を遙かに超過するのを常とした。かくて一九四四年から一九四五年に亘つては上空、海上、陸上到る所の戦場に於て特攻作戦は敢行せられ敵が之に對する對策を講ずるに伴ひ更に組織化せられ機械化せられ其の方法亦逐次發達を遂げ敵軍に大なる恐怖をあたふるに至つたのである。

(二) 航空特攻作戦

陸海軍航空特攻隊實現に至る迄の経緯

一九四二年末頃までは日本陸海軍の航空は量に於ては劣つて居たが質に於ては優秀であつたので數倍の敵に對し作戦の自信を持ち常に輝かしい戦果を擧げることが出来たのに「ソロモン」攻防戦を主機として後我の航空勢力は量質共に著しき懸隔を生じ戦局の全途に一抹の暗影を投じた。此の頃日本軍將兵の心中に期せずして湧いて來たのは特攻精神でありこれが航空特攻として現實に示された道筋は一九四四年五月「ビアク」島作戦に於てであつた。

即ち五月下旬米軍「ビアク」島に上陸を開始するや當時「ソロン」に在つた飛行第五戦隊（戦術戦隊）長高田少佐は部下三機を率ゐる獨り「ビアク」南岸に在つた敵艦攻撃の爲に出動した。少佐は出動に當り部下と共に生還を期せず誓つて任務を完遂し



友軍の危機を救ふべきを約した。右攻撃隊の内三機は敵艦逐艦に突入して撃沈せしめ他の一機は未歸還となつた。之が敵艦船に對し飛行機を以て計画的に衝突攻撃を加へたものとして記録に残る最初のものである。

次で同年六月南方戦場に於て輸送船団護護中の一飛行機は敵潜水艦の發射した魚雷に對し体官の攻撃を加へ我が輸送船の危急を救つてゐる。

同年十月十九日英機動艦隊が「アンダマン」「ニコバル」群島に來襲の際野戦補充飛行隊副隊長阿部中尉は戦闘機を以て敵空母に体官攻撃を加へて之を撃沈し此の攻撃法に依る戦果の偉大さを實證して全軍に大なる自信を與へたのである。阿部中尉は既に久しい以前から戦闘機の体官に依り航空母艦を撃沈する手段に就き研究して居た人であるが敵艦攻撃の爲機上の人となつた時、機付整備兵を呼び寄せ宛發信すべきを依頼した手紙の

中に「敵大型艦と共に虎を敵らさん皇御嶺の先驅となり進か幾萬里の彼方まで見敵必殺の闘を繰らせつゝ戦ふ身上誠に無上の祝喜と光榮とを覺える」といふ要旨が認められてあり特攻戦士の心境が明かに窺はれると思ふ。

又一九四四年六月頃以降Bにより内地が空襲せらるゝに及んで特攻飛行機は常に特攻戦法を採用して敵機に体官を行つた。比島決戦開始前大本營陸軍部が陸軍航空部隊の主攻目標を敵輸送船と決定した際艦船の撃沈を最も確實ならしむる方法に就き航空部隊に於て研究した結果、技術優秀なものは一機數船を屠るを可とし技術未熟な者は少くも一機一船を屠る爲に衝突戦法を可とするの結論を得此の戦法に適する如く飛行機の一部に改造を加ふべき意見を大本營に具申した。前述阿部中尉の航空母艦攻撃の頃から大本營に於ては体官攻撃の成果確實なることを認め此の方法を以て敵艦船の攻撃を企圖し「レイテ」作戦の頃迄



願者を内地に募り多数の特攻戦士を決戦場裏に推進した。之と同時に特攻の崇高なる精神に應ふる爲特別進級の恩典を制度化した。此の頃海軍に於ては一名の人員に依り操縦せられ目標の手前約三十哩に於て抱かれて来た攻撃機を離れて目標に衝突する櫻花と稱する有翼爆弾を又陸軍に於ては飛行機の胴体の前方に一屯内外の爆薬を装填して目標に衝突自爆する櫻彈を製作し一九四五年春から實用に供せられ敵艦艇に對し猛攻を揮ひ始めたのであつた。

2 比島作戦に於ける航空特攻

一九四四年秋「レイテ」島方面に決戦生起すると共に悲壯なる決意に燃ゆる特攻志願者が續出して来たので大本營に於ては逐次之を假編成の上比島に派遣した。

當初特攻隊は其の攻撃を最も意義あらしめんが爲専ら敵機動艦隊の攻撃に使用する如く計畫せられ特攻の志願者を濱松、舞田

兩飛行學校に募り技術優秀なる爆彈操縦者十二名と新式重爆彈機四機とを以て高城隊を編成して比島の第四航空軍に隷屬し之を以て十一月十三日「ルソン」島東方海面に現出した敵機動艦隊を攻撃した。爾後内地より陸軍と推進せられた特攻隊は「レイテ」方面に於ける戦況の逼迫と逐次進出する特攻隊の技術低下に伴ひ上陸海面に於ける敵艦艇の攻撃にも之を使用することとなつた。

此等の航空特攻部隊は第四航空軍司令官隊號命名の後更に其の隷下飛行師團又は飛行集團に配屬せられ其の數合計約二千機に及び十一月下旬以降は第四航空軍の主戦力となつたのである。第四航空軍特攻作戦實施の概要左表の通りであつて「レイテ」作戦期間に於ける其の攻撃回数三十三回、体當機合計百三十五機以上を以て約百五十隻の敵艦艇に損害を與へ命中率極めて良好であつた。



月 二 十				月 一 十			月	
日一十三至日一自				日十三至日二十自			日 数	
一九				六			同 待	
九九				三二			機 待	
二二六				他に 不明な 機数 七 一			護 直	
明状○ 況機に 不は一				二六			施 体	
舟上	輸送	軍艦	軍	舟上	輸送	軍艦	區目	
艇用	船	送又	艦	艇用	船	艦	分標	
二〇	二五	五	六	一	一〇	七	(機)	
	二一		一三	三	一	二	(機)	
九〇				二四			計 果	

「レイテ」作戦時期比島方面に於ける航空特攻作戦概況表



計 合	月 一	
間日三十六	日三十至日一自	
三三	八	
不明	不明	
不明	不明	
一三五 他機に 不明は	四七	
	輸送船	軍艦
九三	八	一一
五七	一四	三
一五〇	三六	

3 沖縄作戦に於ける航空特攻

比島決戦に於て戦力の大半を消耗した日本航空部隊としては来るべき沖縄作戦に於ける艦船攻撃の主体は之を特攻に求めなければならぬこととなつた。沖縄作戦開始前大本營に於て研究の結果本作戦に於ては陸海軍とも特攻を以て攻撃の主体となし陸軍は輸送船を主攻撃目標として約三百隻撃沈を目標とし海軍は機動艦隊を主攻撃目標とした。敵が沖縄本島に上陸したのは四月一日であつたが飛行部隊の展開が遅れた關係上本格的な攻撃開始は四月六日であつて主力を以て九州方面から一部を以て臺灣方面から攻撃を加へた。

第六航空軍は聯合艦隊司令長官の作戦指揮の下に九州兩端の基地を使用し第五航空艦隊と協同して作戦に任じ其兵力運用は間歇的に襲撃攻撃を加ふる主とし別に少數兵力を以て此の間隔内に於て奇襲攻撃を実施した。



第六航空軍機務特攻部隊は編成後日尙淺く練度不十分、器材不良且技術に比し戦場が離隔してゐた關係上戦力の發揮に遺憾の點が多く又成果の確認が困難であつた。第八飛行師團は臺灣北端の基地を使用し九州方面からの航空作戰に策應したのであるが同師團は作戰準備比較的整ひ特攻の練度又良好であり、爲して九州方面の作戰推移に応じて天候氣象を利用し比較的少數機を以てする奇襲戦法を採用し常に攻撃成果を確認しつゝ大なる戦果を擧げてゐた。

沖繩作戰間に於ける特攻兵力は全期間を通じて第六航空軍は七十九隊約六百八十機、飛行第八師團は二十七隊約二百三十機でもつて之に依る戦果は前者のものは寧ろではないが後者即ち第八飛行師團のものは寧ろ沈没艦船約百七十隻と記録されて居り其の命中率は比島作戰のものに比し若干低下して居る

※本土作戰準備に於ける航空特攻

日本航空部隊は比島作戰、沖繩作戰と相次で戦力を喪失した上更にB-29の都市爆撃に依り飛行機の生産は低下の一途を辿り且航空燃料の不足は戦闘必須の訓練時間を極度に短縮しなければならぬ状態となり一方敵進攻の歩度は漸次早まつて來てゐるので國內にある飛行機は機種如何を問はず之を活用し全航空が特攻となるの思想の下に本土作戰を準備した。即ち最後には航空全軍が特攻に依つて敵艦船を撃滅すべく企圖したのである。

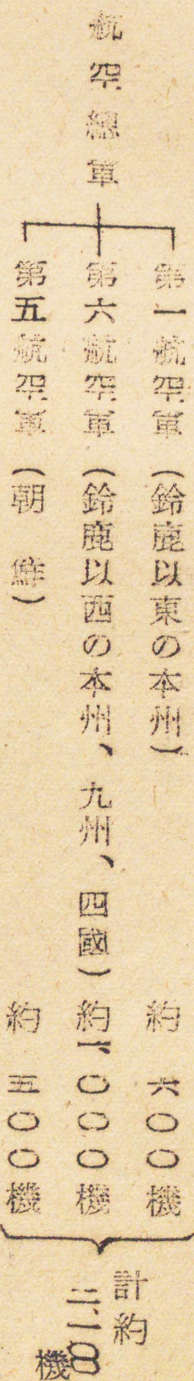
本土決戦に於ては陸海軍航空兵力の運用は左の根本方針に據ることと決定せられた。

- A 主として特攻攻撃に依り敵上陸船團を撃滅する。
- B 敵機動艦隊に對しては上陸船團に對する有効なる支援を阻止する。
- C 地上作戰直接協力は敵の艦艇射撃部隊を制壓することを以て本



則とする。

而して本土作戦の爲準備した陸軍特攻兵力の概要は左の通りである。



本土決戦に對する航空部隊の兵力部署は敵の上陸を豫想する方面に機動力の少ない部隊を豫め分散秘匿し爾餘の部隊を後方に廣く展開し置き機動に依り隨時隨所に戦力を集中發揮する如く計畫せられた。

航空部隊は全軍特攻たり得る爲特攻隊以外の一般部隊も各々其の部隊の機動、性能、能力に應じ特攻の訓練を受け敵の上陸に方つては其の第一次上陸兵團を殲滅するを以て主義として居たので敵の上陸開始後概ね十日以内には航空の全力を消耗し盡し爾後は

空なき作戦となるも之を辭せずとの決意であつた。戦力投入の要領は既上陸船團の泊地侵入までの間晝夜を問はず先づ實用機の特攻機を以て艦砲射撃をなす艦隊、上陸船團支隊空母、上陸用舟艇搭載の特殊船及大型船を攻撃し敵の泊地進入後に於ては先づ練習機の特攻機を拂脱まで分散位置から引出し機送船を目標として攻撃せしめ實用機の特攻機は艦砲射撃に任ずる艦隊及大型艦船を目標として攻撃をなす如く計畫せられた。

5. 航空特攻作戦の一般要領

比島作戦時期に於ては一特攻隊は十二機を以て編成一隊を一團として二乃至三隊、状況に依り更に多數を以て目標に連續波狀攻撃を指向して居たが後に隊長の技術が逐次低下した等の關係上沖繩作戦末期頃から一隊六機編成を採用した。特攻機は飛行場から離隔した地點に充分秘匿し置き諸準備を整へた後使用直前滑走路に搬出して發進せしめた。



遠攻に當り戦術飛行隊は當に特攻隊の護衛及航行の掩護に任じ直接掩護と間接掩護とを併用するを有利としたのであるが沖繩作戰に於ては戦術飛行兵力の不足と其の航路巨離の關係上大部は基地の發進掩護と航路上の敵機部隊の排除及牽制とに上り目標上空に於ける制空は殆ど實行する事が出来なかつた。此の爲に特攻隊の損害を著しく増加する結果となつた。

特攻隊は目標上空に到着するや一機一艦船主義に依り夫々敵艦船に向つて突入し目標が空母、戦艦等大型のものなるときは數機一艦に突入して其の墜沈を確實ならしめた。突入は概ね三十度の降下角を以て通常千五百呎乃至千八百呎の高度より目標の致命部に向つて突進した。

特攻隊の運用は一般飛行隊の運用と同様輕快、功妙なる機動力を有することには大いに希望する所であるが特に沖繩作戰以後に於ては使用機種並に搭乗員の練度の關係上機動性が十分でないので逐

次單純固定的なる運用をなすの止むを得ない状況であつた。

戦果の確認に就ては特攻隊よりの無線連絡、誘導機又は掩護戦闘機の報告、戦果確認機の偵察、戰場附近の友軍地上部隊の目視に依つたのであるが確認は相當困難な問題であつた。

特攻隊又は特攻機に對する任務の附與は其の上級の指揮官が之に戦闘目的のみを示し体當をなすべきや又は一般の攻撃法に依るべきやに就ては技術、責任觀念其の他の状況に基き各人之を決定したものであるが事實は既に述べたやうに驚くべき多數の体當後の出現を見たのである。

#### 6. 空挺攻撃に於ける特攻

此に述べる空挺攻撃に於ける特攻作戰といふのは一般の落下傘部隊の用法の如く着陸後他の地上部隊と連絡し得て最後まで健在の希望を持ち得る部隊の作戰を指すのではなく、短空機に依り機動を行ひ著陸の後地上特攻部隊となる空挺部隊の作戰を謂ふのである



る。當時此の種の陸軍特攻作戦の秘匿名を義號作戦と呼稱して居た。

A 「レイテ」作戦に於ける義號作戦

第四航空軍は豫てから真に重要な戦局になつたら最後の手段として敵飛行場に奇襲攻撃を行ひ敵の在地飛行機及重要施設を破壊し一舉に敵基地を制壓する作戦の要領に關して研究を重ね義號作戦といふ特攻部隊を準備して居た。此の作戦は當初「モロタイ」基地に對して實施する如く計畫して居たが一九四四年十一月二十五日頃「レイテ」方面に對する地上兵力増強の爲の海上輸送の重要性に鑑み急遽「レイテ」方面「ブラウエン」南北飛行場の制壓に之を使用する如く變更せられた。それは當時に於ける彼我航空勢力の關係上從來の戦術機の掩護のみを以てしては成功の見込なきものと豫想せられたからである。實施部隊は飛行第二百八戦隊で「ダグラス」主翼輸送機四機、

人員約八十名より成り十一月二十六日夕「リバ」基地を發端して攻撃を敢行したが戦果は明らかではない。但し右の内二機が目標飛行場外の一地點に着陸したことは確實で翌二十七日午前中「ホルモック」上空に飛來した敵機なく日本軍の輸送船團が無事「ホルモック」突入に成功した點から觀て相當の効果があつたのではないかと判断せられた。

B 「レイテ」作戦に於ける第二進軍の空挺作戦

地上兵團の計畫した義號作戦に對し「ブラウエン」飛行場を攻撃する目的の下に第二進軍を以て落下傘降下作戦を實施させる計畫であつた。此の進軍は二機より成り一機約二百五十名を以て編成せられ義號作戦の四十分を有して居た。第一次進軍部隊は十二月六日「クラーク」基地を發進し「サンパウロ」「ブラウエン」方面に向つたものは降下を終り殆ど全機討還したが「トラック」「タクロバン」方面に向つたものは一機も討還し



なかつた。

第二次以後の進攻は出発したてが天候不良に依り目標上空に到達  
することが出来なかつた。次で第七日敵の「オルモック」上陸  
に依り状況一變し「ブラウエン」に對する爾後の空挺作戦は第  
一次進攻に依り同飛行場を一時奪取したに拘らず中止するの止  
むを得ないこととなり増援を送る事が出来なかつた

C 沖縄作戦内に於ける義勇作戦

第六航空隊は次いで「サイパン」基地に於ける B29 制壓の爲義勇  
作戦を研究準備して居たが沖縄作戦が生起し且状況の推移は逐  
次沖縄に對する我が航空攻撃を迫るならしむるものがあつたの  
で「サイパン」に使用を決定してゐた義勇部隊を同地に使用す  
ることに變更した。

此の義勇作戦の目的は沖縄の北、中兩飛行場に強行着陸して敵  
航空勢力を一時無力化し其の隙に乗じ陸海軍航空兵力を擧げて

沖縄附近敵艦船に對し徹底的攻撃を實施するのになつた。  
實施部隊は人員百二十名より成る義勇空挺隊と人員三十二名、  
九七式重爆十二機から成る第三獨立飛行隊とで第三獨立飛行隊  
は義勇挺進隊を準備し著陸後は兩部隊同一行動を執つて攻撃に  
任ずる如く計畫せられて居た。五月二十四日夜先づ十四機の重  
爆隊を以て沖縄北、中兩飛行場を十機の双座隊を以て伊江島飛  
行場を夫々爆撃し義勇隊は右爆隊後約三十分を間し即ち瀬ね  
二三二〇頃強行着陸を實行した。但し内一機は發動機故障の爲  
中途より引返し又他の三機は主力に遅れ沖縄飛行場を發見し得  
ず攻撃を断念して引返した。隨つて成功したのは八機と思は  
れ義勇空挺隊は所在の軍需品施設に對し攻撃を加へ二十八日頃  
まで奮闘を續け特に著陸の翌二十五日には殆ど完全に沖縄敵航  
空基地の活動を停止せしめる成果を擧げ得たと思はれる。それ  
にも拘らず右の戦機を利用して行ふ決定の陸海軍航空の總攻撃



は天候の不良に依り實施出來なかつたのは返す返すも遺憾な事であつた。

7 航空特攻兵器

- A 櫻 花
- B 櫻 弾

(註) 内容追て挿入する

目 海上特攻作戦

上陸作戦實施中に於ける輸送船と之が接収艦隊及港灣に碇泊中の艦隊は防衛上の大きい弱點を敵に曝露する。成るべく小さな海老を以て最も大きな鯛を釣るが爲に海上特攻作戦に於ては攻撃目標として右の様な状態にある敵艦隊を退ぶこととなり、開戦當初真珠灣に使用せられた豆潜水艦、一九四四年から翌年にかけて「ウルシー」泊地等に活動した人間魚雷、一九四五年比高、沖繩等に於て使用せられた連絡艇及其他の海上特攻兵器は何れも此の構想の下に有利な條件に於ては僅か二三名の人命と僅少の資材とを以て何萬噸もある巨大な艦船を海中に葬ることが出來たのである。海上特攻作戦の特徴は敵の意表に出づる器材の考案、整備が第一の問題であつたこと



て、有り来りの舟艇、資材を濫用して成功を収めることは困難であつた。

ノ豆潜水艦（註）内容通て挿入する

2 海上挺進部隊

一九四四年陸海軍とも塔々時を同じうして連絡艇と稱する舟艇を整備し比島、硫黄島、臺灣、沖縄及内地の作戦に使用する用途を以て諸準備を整へた。此の舟艇は長さ約四、五米、自動車の發動機を装備し速力約八節で二百瓦の発電二個を搭載し乗員二名を以て運轉し目標に衝突自爆する結構を持つて居た。

連絡艇三隻を以て一分隊とし小隊、中隊、戦隊何れも三單位編制を採り人員は幹部以下兵に至る迄最優秀の者を充當した。

挺進戦隊は攻撃部隊であり此の戦隊一箇には必ず海上挺進基地大隊一箇を組合はされ基地大隊は主として戦隊の爲基地の設定、整備、軽易なる資材の整備作業等に當ることを任務として居た。

挺進戦隊の運用は敵の上陸を永上で阻止する爲に敵輸送船を夜暗等に乗じ其の泊地に於て撃砕すること。を主眼として居た。而して比島作戦時期には豫想する敵の上陸海岸に豫め展開して居たが臺灣に於ては敵の上陸前に於ける艦砲射撃及空爆の被害を避ける爲に豫想使用地點の側方に展開せしめ沖縄に於ては連絡艇の機動限度を顧慮して更に許す限りの遠距離に離隔展開し次いで内地の作戦準備に於ては沖縄の戦訓から主力を陸上に展開し陸上輸送に依つて所望の海面に出撃する方法を採つた。

比島に對しては陸軍の海上挺進戦隊七隊を挺進し主力を以て「リంగాエン」方面に一部を以て「バタングス」「ラモン」灣方面に展開せしむる計畫を以て一九四四年秋から諸準備を進めたのであるが部隊の海没、器材の輸送難の爲支障を生じ實際攻撃に使用したのには「リంగాエン」方面に於て約百五十隻、「バタングス」方面に於て約五十隻に過ぎず「ラモン」灣方面のものは之を他方面



に轉用した。

「リングアエン」方面に於ては全力を「カバルヤン」島方面に使用し連絡艇穩重の設備、基地の防衛設備、糧食、燃料の集積及通信設備等の基地設定が概ね完了したのは一九四五年の一月初頭であつた。同月九日朝から「リングアエン」灣に上陸を開始した敵船團に對し「カバルヤン」島方面の挺進隊は翌十日日没後全力を以て突撃を敢行した。生存者なき爲に同状況及戦果は不明であるが「ナギリヤン」方面に在つた第十九師團の陣地から同夜敵船團中に闇を穿く八本の火柱を望見したこと、敵が其の直後管制を行ひ激烈なる銃聲が聞えたこと、敵が生文の無線を以て船から三百米に近接する一切のものを射撃すべく命じたこと及日本軍が「リングアエン」の海上に奇襲を行ひ米軍に損害を與へたといふ「ロンド」放送があつたこと等から此の特攻作戦が敵に相當の損害を與へたことは事實であると判断せられた。「バタンガスマ」方面の戦隊

は「マビニ」附近に展開して一月初頭敵の來攻に際し特攻隊に任じ某時期敵艦船二、三隻に損害を與へたといふ情報があつたが詳細の状況は不明である。右二方面に活動した以外の敵隊及協力戦隊出動後の基地大隊は共に地上戦團に参加した。次に敵が「リングアエン」方面に來襲した後の某日獨立混成第五十八旅團の海上特攻を志願した日本兵四名を二組とする二組の部隊が夜闇に乗じ「リングアエン」海東岸の「パウアング」附近を發進して敵船團を攻撃した。此の小部隊は爆薬を積實した「ドラム」體を引きながら全員游泳を以て敵船の護衛に到着し點火と共に自爆を決行して敵船に損害を與へたことが確實で之は游泳に依つて歸還した一、二名の兵の報告に依つて明らかになされた。

### 3 人 間 魚 雷

#### 4 其の他の水中特攻兵器

(註) 内容追て挿入する



(四) 地上特攻作戦

(註) 内容這て挿入する



